



けれど僕には、
僕のこの手には

takano

「あと5時間しかないんだよ」

それは酷く、端的な『言葉』。

蝉の音が下方にある校庭から聞こえてくる。重い大気に充満するような声へと耳を傾けながら、沖田はゆっくりと煙を吐き出した。

初夏の太陽はじりじりと照り付けていて、今寝転んでいる屋上もそれなりの暑さになっている。衣替えを終えたばかりの制服から出た二の腕が、直にその熱に触れて少し痛かった。

ぼんやりと見上げた空には、真っ青な色と対成す白い雲。気圧のせいかわ結構な厚みのあるそれが、視界の端から天へと伸びている。

あの雲の名前は何かだっただろうか。

そんな取り留めも無い事が、不意に脳裏を過ぎった。

確か先日授業の端に出てきたその名称。それが思い出せなくて、少し悔しい。

こんな事だったら真面目に授業を受けていれば良かったらどうかと、生まれて初めてそんな殊勝な思いを巡らせる。役に立たない知識ばかりが脳を占めている事に、今更ながら気が付いた。

「沖田、何やってるんだ？」

ふと声を掛けられて目を瞬かせる。記憶に残る、妙に落ち着き払ったその声。顔だけでそちらを向けば、そこには隣のクラスの三郷が立っている。逆光で心情ははっきりとしなかったが、彼が身を屈めたせいで僅かに機嫌の悪そうな顔が見えた。

「あー、お前か」

そんな言葉で迎えると、彼は細い眉を顰めてから不服気に自分を見下ろす。元々切れ長の目をしているので、その表情は余計に冷やかかだった。

「悪かったな」

相変わらずの憎まれ口調だ。沖田はそれに小さく笑ってから、勢い付けて身を起こした。

持っていた煙草の灰が落ちて、制服の腹に掛り落ちていく。慌ててそれを払っていたら、三郷は肩を竦めながら隣に腰を下ろした。

「さっきの続き。何やってんだ？」

「別に」

答えようもなくそうはぐらかせば、不機嫌そうに彼は自分を睨み付けた。しかし他に何も答えられない。実際何か目的があって、自分はこんな場所にいる訳ではないのだ。

「ここで最期を迎えるってのもオツかなと思ってさ」

おどけるようにそんな言葉を吐きながら、三郷が座る反対側のコンクリートへ煙草を押し付けた。それは指先の圧力に潰されて奇妙な形で捻じ曲がる。名残惜しそうに白煙が立ち昇り、思わずつまらなそうに息を吐いてしまった。愚痴っぽい口調になるのを止められないまま、無意識に呟いていた。

「どうせ何処にいたって一緒だしな」

すると三郷は、先程までの自分と同じように空を見上げた。昼下がりの強い陽光に、彼は眩しげに白い手を翳した。

ほんの3日前の出来事だ。人類滅亡なんて、どこぞの三流映画のCMのようなニュースがこの町を駆けつけたのは。

マトモに信じた訳じゃない。それは恐らく、自分だけではなかったと思う。

だが繰り返しがなり立てるラジオやTV、果ては翌日の新聞のどの面もがその事を書きたてた時、それは下手なSF映画から現実へと摩り替わった。

国家危機対策レベル特S。所詮三文芝居の一シーンか、妄想狂の戯言だと思っていたそんな言葉。物語ならここで新たな局面を迎え滅亡を回避する得策が現れる頃だが、現実はその都合の良い二次元の夢をあっさりと覆した。

人類滅亡まであと3日。

全ての生命が死に絶えて、この星の命が尽きるまであと3日。

錯綜する情報が混乱を齎して、結局何が原因なのかなんて明確に伝わらないまま時間だけが過ぎていく。隕石だとか核兵器だとか気象と環境の変化だとか。そんな在りがちな危機感が、実しやかに囁かれ始めてから自分達は初めて現実に気付く。

よく考えれば、破滅の引き金となり得る物は日常に幾らだってあったのだ。

まだ最後の時を知る事が出来た自分達は幸運な方なのかもしれない。きっと世界中の大半の生き物は、その終末を何も知らないまま迎えるのだろうから。

沖田は制服の胸元を探り、内ポケットから再び煙草を取り出した。啜ってから火を点けても、三郷は特別異を唱えたりはしなかった。

遠くからは蝉の声。それよりも彼方から、何か大きな物がぶつかり大破したような音。

喧騒は少しずつ遠退いて、宣告された時刻に近づくにつれ世界は静けさを増していくような気がする。第一報が流れてから数十時間。きっと訪れるであろうその瞬間まで、あと数時間程。

幾人かはまだ終焉の回避を目論んで行動しているようだが、普通の学生である自分達には最早関係の無い事柄にも思えた。

眼を閉じれば、それこそ普段と変わり映えの無い風の匂いがする。排気の混じった咽喉が痛くなるようなそれを呼吸と共に吸い込んで、沖田はつまらなそうに隣の彼を見遣った。

「お前さあ、信じてる？」

世界の終わりってやつを。

そう続けたら、彼は下らないと言いたげな視線をちらりと投げてきた。それから身体の後ろへ両手を着くと、冷めたような口調で言った。

「馬鹿げてるとは思うけどな」

否定の言葉は無い。つまり信じざるを得ない状況まで、自分達は来てしまっていると言う事。

彼の台詞に改めて現実を突きつけられた様で、沖田は僅かに眉を顰めた。別に彼が信じていないと言った所で何も変わらない。それは分かっていたが、どこかで自分は期待していたのかもしれない。

あと数時間。恐らくは6、7時間位だろうか。

こんな状況にまで追い込まれているにも係わらず、実感が湧かないのは当然の事だと思う。取り乱した様子の人間の姿を見ていたら、奇妙に恐怖感だけが薄れていった。恐慌の時と場所を避けてこんな場所で空を見上げていれば、やはり世間は平和そのもので。

ただ無駄な音が僅かに減っただけだ。

「せめてあと一ヶ月とかあったら、もうちょっと無茶できたのにな」

何となく沈黙に耐え切れず、沖田はそう言って砕けた笑みを浮かべた。怪訝な顔をして彼が覗き込んでくる。人の心裡まで覗くような眼だなんて、そんな取り留めも無い事を思った。

「無茶って？」

「銀行強盗とか、正義の味方とか」

「は？」

「3Aの水谷先輩のスカート捲るとかそんな事」

「お前バカ？」

一刀両断にされてしまい、その彼らしい歯に衣着せぬ喋り方に苦笑する。1年の時は同じクラスだった。そんなに仲が良かった訳ではないが、だからと言って嫌いではなかった。その印象は、今もあの時も変わらない。

冷めているようで、案外言葉が悪くて、優等生面しているくせに結構意地の悪い彼。それでいて意外に屈託なく笑う人。

ああ、そう言えばこいつの事は結構好きだったのかもしれないなと。

光に透ける柔らかそうな髪の毛が、不思議な色だと思っていた時もあったなと。

そんな事を、不意に思い出した。

「大体短すぎるんだよ」

自分の意識に気付く事無く、三郷が小さく吐き捨てる。彼はどちらかと言えばあまり拘りの無い人間だと思っていたので、その台詞が少し引っ掛かる。沖田は首を傾げながら口を開いた。

「お前は何かやりたい事とかあったか？」

尋ねればその質問が心外だと、そう言外に含ませた彼の顔。

「じゃあお前は何もなかったのか？」

逆に問い返されて、口を噤む。意志の強そうな双眸に何故か耐え切れなくなって、沖田は彼の顔から目を逸らした。滑る視界に映る彼の指先が、綺麗にズボンの皺を寄せている。

「あったと思うけど・・・大した事じゃない」

茫然とその指を眺め、吸う事もなく短くなってしまった煙草を再びコンクリートへ押し付ける。指先に熱の名残。それは隣に座る彼に対して湧いた熱と同じで、ちり、と音を立てて胸を灼くようだった。

「大した事じゃないって？」

「海に行きたかったなとか、そんな事だな」

「ホントに大した事じゃないな」

少し馬鹿にする様にこちらを見遣り、それから彼はくすくすと笑い出した。唐突に笑い出したその横顔を不思議そうに見れば、彼は微かに目を細め遠い青空を指差した。

「水平線ってあるだろ？」

その言葉に、白い指先が指した方向を見遣る。そこには決して海などはなく、ただ薄汚れたビルが幾つも重なり合うように乱立して居るだけだ。

「水平線？」

聞き返したが彼は自分の言葉など気にも留めず、どこか懐かしい物を見るような目付きで言葉が続けた。

「あの空と海の境が分かんなくなる位、澄んで見える日があるらしいぞ」

「へえ」

相槌を打ってはみたが、それに対する答えはなかった。ただ単に自分が海の話を持ち出したから、彼もそんな事を思い出したのだろう。その言葉には何か意味があったのかもしれないし、もしかしたら何も含みもないのかもしれない。それ以上彼は言を繋がなかったので、言葉の本意は結局の所分からないままだ。

ただ盗み見た横顔が。

「・・・・・・・・」

ある筈の無い海の幻を追うような彼の目が。

「そう言えば・・・」

ごくりの喉を鳴らして言葉を選ぶ。不用意な事は言ってはいけないと思っていて、それでも陽光を映した彼の双眸が、とても印象的だったから。

「・・・俺、もう一個あるわ」

そう搾り出した自分の声が、ほんの少し掠れているのが分かった。

「何だ？」

そう興味も無さそうな声で彼が尋ねてくる。一瞬その視線に負けそうになりながらも、一度口にしてしまった言葉は抑制が効かなかった。

咽喉が渴くのはきっと太陽熱のせいだけではない。もう少しで全てが終わるのだからと、そんな切迫観念から自分はおかしくなっているのかもしれない。けれど今背筋を駆けているのは、緊張と、困惑と、紛れもない相手に対する性欲で。

「・・・童貞捨てたかったとか、そんな事」

喉を鳴らしながらそう答えた。ああ、自分は馬鹿だ。よりもよって二人きりの時に、しかもこんなに熱っぽい口調で告げてしまった。

一瞬彼は眼を丸く見開いて、それから予想通りの顔でこちらを見る。

「下らねえー」

一笑に付されてしまい、それで沖田は我に返った。今自分が考えた事を再認識し、思わず赤面する。それを誤魔化すように、三郷へ向かい「うるせえ」と悪態を吐いた。

冗談で済んで助かった。そう思うと同時に、下腹へ溜まるような熱に苦笑した。だがふと沈黙に気が付いて、ゆっくりと顔を上げた。

彼は何故か黙り込み、じっと自分を見ていた。それが心情を見透かしているようで、少し居心地が悪かった。だが彼は一度眼を眇めた後で、人の悪い笑みを浮かべた。

「何だよ」

逆に問い返すとそれに呼応するように、彼が表情を緩めてこちらへ身を寄せる。触れてもいないのに、肌に体温が感じられて思わず赤面した。しかしその後彼が口にした言葉は、自分にとっては体温以上に刺激が強かった。

「同意、とか言ってやろうか？」

「は？」

予想外の言葉に、今度はこちらが眼を瞠る。彼は立てた膝に頬杖を着いた格好で、下から見上げるように自分へ顔を向けた。僅かに細められた双眸が、陽の光を照り返す。

不思議な色だ。さっきも思ったが、どこか自分とは違うもののような気がする。同じものを映している筈なのに、自分は違うものを見ているような気がする。

だが彼が言った台詞は、自分と同じ感覚を抱いていると告げている。

「何言って・・・」

思わず口籠った自分へと、三郷は更に身を寄せた。

「童貞、捨てたいんだろ？」

俺が相手してやろうか？

言外にそう含ませた、その熱っぽい口調。遠くで大きな爆発のような音が響いたが、それすら意識の外に押し出すような彼の声。

「・・・っ」

沖田は一度ぎり、と奥歯を噛んだ。それから勢いに任せ隣の彼の腕を掴む。じんと痺れたような下肢が、血液を留まらせて脈打った。

そのまま彼を引き寄せ口付ける。歯がぶつかる嫌な音が聞こえたが、それよりも唇に触れた乾いた感触が思考を占めた。

鼓動が早まって息が詰まる。コンクリートに押し倒した彼の表情が、痛みのせいで僅かに歪んだ。それを見てしまってから、つい竦んでしまった己を奮い立たせた。

「冗談、大概にしないと本気でやるぞ」

少し怒気を孕ませながらそう言う。彼は何故かぼんやりと自分を見上げ、それから再びくすくすと笑い始めた。詰ろうとした自分の方へゆっくりと手を伸ばし、彼は小さな声で言った。

「結構本気のもりなんだけどな」

冗談だと含ませているように口調で、しかしその言葉は真逆の真意を告げて、彼の手はすりと自分の首に回る。沖田は大きく呼気を吐き出しながら、勢いのまま組み敷いた三郷を見下ろした。

無言で見詰め合えば、相手の表情から笑みが消えた。その手がささやかな力で自分を引き寄せる。

ふと、彼が小刻みに震えている事に気付いた。

「・・・三郷・・・」

「畜生、情けねえな」

密着した耳元で、彼の小さな弱音が聞こえる。顔は見えなかったけれど、それは酷く切ない音を持っていた。絶望なんて悲観的な感情よりも、もっと強い懐古的な意識が溢れている。

死にたくない。

そう思っているのに、まだこの時点でも世界の終末なんて信じられないのに。

現実には影のようにぴたりと背中に貼り付いて、決して自ら離れたりしない。振り向いても明確な姿を示さないそれは、恐怖と言う感情を沸々と生み出している。

考えないようにしていた。

現実味のなかったその恐れは、最早誤魔化しきれない状態なのだと彼に教えられたような気がする。

救いが欲しい。助けて欲しい。

けれど自分にはそんな力はないのだ。そして彼にも、『終末』を下らないと笑い飛ばす強さなんて在りはしない。

ならばせめて、互いに縋りつく位の猶予は与えてくれてもいいのではないか？

「後悔すんなよ」

低くそう言ってから、沖田は抱き締めた彼の耳朶へ噛みついた。常に冷静であった彼の肢体が、自分の手の中で小さく跳ねる。それだけで自分の息が、大気の熱と共に上がっていく。

性急に制服を剥いで、直にコンクリートへ彼の肩が触れた。熱いだろうと思ったが、行為を止める気はなかった。彼の手は今も自分の背に回ったままで、所在無げに服を掴んでいた。

「どうせなら・・・っ女が、良かったな」

途切れ途切れに憎まれ口を叩く、その唇を指で強くなぞる。

「お前今更だぞ」

この期に及んでそんな事を言った彼の首筋へ、趣向返しと言わんばかりに歯を立てた。彼は一度息を詰め、それから細く長く吐き出した。背中に触れる男にしては繊細な指に、一瞬だけ酷く強い力が込められた。

「・・・嘘だ」

ぼそりと呟いた、その声。

顔を見る為に身を起こそうとすれば、彼の腕がそれを制止する。コンクリートに着いた自分の掌が、じりじりと焼けている。彼方では乱暴なクラクションの音が木魂する。

「三郷・・・？」

「お前で、良かったと思ってる」

充満する蝉の声。照り付ける日差しの白い影。陽炎が立ち昇り、頭の芯がくらくらする。

「最後に会えたのが、お前で良かったと思ってる」

消え入りそうなその声が、何事か言を繋いだ。それを最後まで聞く前に、堪え切れず抱き締めた。

感傷なんて互いに柄じゃないのに、思わず咽喉が詰まる。ここへ来て急激に雑多な意識が溢れたようだった。

別に彼を恋愛対象で見っていたとか、そんな事は決してない。自分は男で、彼もそうで、凝り固まった観念の上でその感情は成り立たない。

けれども確かに自分は彼を個の人間として特別に捉えており、そして彼も、同じように見ていたとしたら。

「みさと・・・」

思わず瞑目しながら、沖田は温かい彼の身体を引き寄せた。やっぱり自分は馬鹿だ。その他大勢の中に埋もれていた自分を、こうやって気に止めてくれていた存在に今更気付くなんて。

好きだと思っている訳ではない。女のように彼を守りたい訳でもない。

けれどこのギリギリの状況から眼を逸らす事を許さない彼が、最期を自覚して尚気丈に振舞うその姿勢が。

今の自分にとって、どれ程の抛り所となっているのだろうか。

「さっさとしろよ、馬鹿野郎」

いつものふざけた口調に戻り、三郷は揶揄するように笑った。それを受けて安堵する。自分の情けない顔など、彼に晒したくはなかった。

肌に唇を滑らせながら、じつとりと浮いた汗を舐め取りながら。少しずつ露になる彼の姿態を記憶に止め、それを抱く。下肢を暴き直に触れ、同性の高揚が掌に触れた時に熱っぽく呼気を吐いた。

「・・・っ」

彼が眉根を寄せる。紅潮した小綺麗な顔が歪んだ。細い髪の毛が汗で額に貼り付いて、払った時の感触の柔らかさに一度だけ手が止まった。

指先で零れる体液を掬い、下肢の奥をそれで解し、細く上がる悲鳴を唇で塞いだ。知識なんてなくても、自分の求める場所が分かるような気がする。この中心でもどかしさを訴える、自身の熱の求めるものが。

ファスナーを下ろす音が聞こえたのか、彼はずっと閉ざしていた双眸を開いた。泣いているよ

うな顔にも見えたが、生理的なものだろうと思い込む。自分の手で誰かを泣かせただなんて、こんな不安定な世界であっても思いたくなかった。

起ち上がった自身を彼へ幾度か押し当てる。彼の腕が自分から離れない事を確認しながら、拒絶が彼の中へない事を確かめながら、その足を抱え上げた。

「・・・ぐ・・・っう！」

押し殺された嬌声。押し戻されるような強い力。意思に反して男を受け入れないそこは、強く自身を締め上げる。

「あ・・・あ・・・っ」

か細く漏れたその声に、沖田は強く唇を噛んだ。自分の汗がこめかみを伝い、焼けたコンクリートの上に弾けて消える。大気の熱と、己の熱と、それから彼の体温に眩暈がする。

こんな壊れかけの時間の中で、意識した事など殆どなかった筈の相手を欲する。それはなんて滑稽で馬鹿げた愚かな行為。

それでもたった一人で最期を迎えるよりは、何倍もマシな気がした。

「あ、く・・・っう」

痛みだけに支配されていた声音が、艶を含み裏返る。それをもっと聴きたかったから、無茶とは知りながら強く突き上げた。根元まで包まれたその心地良さが、彼に直に触れている肌の心地良さが、奇妙に自分を高揚させる。

これでおしまいだと誰かが言った。

あと数時間しかないんだよと、どんなに足掻いたって無駄なんだよと。

こんなに追い詰められていると言うのに、どうして自分達は正直に怖さを認め合えなかったのか。ただ必死で命に縋ろうとする行為を、格好が悪いと思い込んでいなかったか。

結局何も出来ない事を恐れ、無力だと思い知らされる事を恐れ、そして例えここで自分が死んでも、誰一人悲しんでくれないのではないかと怖れていただけではないのか。

「お・・・、き、た・・・っ」

彼が自分の名を呼んだ。それだけで酷く幸せだった。

大丈夫。自分はまだこうやって必要とされているだろう？

自分が生きてきた世界も、捨てたものじゃなかった。自分を求めてくれる人がいた。

(ああ・・・)

どうして自分は、今までこんな大切な事に気付かなかったのだろうか。

彼の唇を塞ぎ、舌を自分のそれと絡める。声が脳を中心に響いて、それだけでどくりと鼓動が鳴った。

「・・・ん、んんッ・・・う」

苦しげな彼を早く解放してやりたくて、何より自分を押しえ切れなくて腰を動かした。手の中の屹立を上下に擦り、限界を告げるそれを高みに導くように。

「・・・！」

激しく彼が四肢を痙攣させる。仰け反ったと同時に、掌に放たれた彼の欲。残滓を絞るように締め上げられて、自分も飲まれるように彼の中で達してしまった。

大きく上下する胸に額を押し当てる。早い心音が、まだここで彼と共に生きていると教えてくれる。

上擦った呼吸を繰り返しながら、沖田は固く眼を閉じた。猶予がない事は、分かっているつもりだった。

「あーあ」

つまらなそうにそう言った彼の声は、性交の名残で掠れていた。

素肌に制服を引っ掛けたままの、だらしない格好で二人横たわる。相変わらず空は綺麗に晴れていて、厚い雲が視界の下方を覆っていた。

腕を後頭部の下で組んだまま、隣に寝転がった彼を見る。その横顔は遠い空を見ている。だが案外、先程言った海の果てへと想いを馳せているのかもしれない。

「何だよ」

尋ねると、茫然とも言える表情が少し翳った。それから唇が動いて、彼は小さく呟いた。

「・・・もう少し、生きたいとか思っちゃったよ」

その言葉に嘘はないだろう。何故なら自分も、同じ感傷を抱いてしまっているのだから。

「俺も同じ事思った」

自分の声が透明な空気に拡散して消える。彼が身動いた気配はなかったが、苦笑に似た笑い声が聞こえた。

「ちょっと気付くの遅かったな」

それに頷いて、一緒に後悔して、一緒に笑った。この綺麗な空がもうすぐ消えるんだなと、そう言えば彼はただ相槌を打つだけだった。言葉数が少なくなると、静けさが周囲を包み、そして

空気が重く押し掛かるような錯覚が徐々に芽生えてくる。

　　独りだときっとどうしようもなく怖くて、泣き叫んでもがいたかもしれない。でも隣に誰かがいるだけで、陳腐なプライドが保たれているような気がした。

自分には世界を変える力はないけれど、この手には己を見失わない力があつた。独りじゃなくて良かった。彼と最後に抱き合えて、本当に良かった。

三郷はやはり空を見詰めたままで、日差しの強さに少しだけ眼を眇める。それから不意に笑い出し、こちらへごろりと寝返りを打った。子供のような表情で、彼はやはり冗談めいて言った。

「痛くなけりゃ良いなあ」

「抱き合ってりゃ平気かもよ？」

咄嗟に冗談で返せば、屈託のない笑い声が返って来る。

「バーカ」

そんな自分を貶す声に、沖田は悪戯っ子のような仕種で舌を出した。

けれど僕には、僕のこの手には

<http://p.booklog.jp/book/84693>

著者 : takano

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/taka2725/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/84693>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/84693>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ